

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

女の人に、たずねてみた。

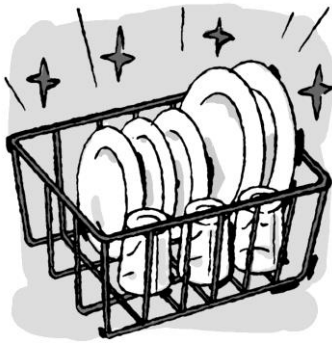
「後始末で、いちばん嫌なことは何ですか」
しばらく考えて、答えが返ってきた。

「食事の後始末かしら。それも夕食後の…」
もちろん、そう答える人は奥さんが多い。自分も家族と一緒に夕食をすませ、お腹もいっぱいになり、やれやれと休みたい気持ちになる。だが、すぐに後片付けをしなればならない。それが、つらいというのである。

男はどうか。女たちに作らせ、後片付けをさせ、自分は寝そべろうと、何をしようと勝手であると考えている。だが、男たちも改めてこれは考え直してみなければなるまい。最低限、

「ごちそうさまでした」と頭を下げるだけでもよいのである。もつとも頭を下げる気もなく、そうしたことも知らない男たちも、かなりいるらしいのだが…。

物に対する感謝は、まず食物から始まると言つてよい。たべものこそ、もつともはつきりと、わが命のもとである。食物をありがたいと思えない人は、およそ他の物質（もの）に対して感謝することは出来ず、その生活は、豊かなものとはならない。食前、食後の「ありがとう」をまごころから思うことができるとき、物質一般に対する



食後の後始末にも 気を配る

丸山竹秋

感謝の心の眼が開くのである。

もちろん、感謝への入り方は食物に対してのみとは限らず、他にいろいろとあるが、食物に対して入っていくことが、いちばん直截明瞭なのである。ところで、その食べた後の片付けがめんどうだ…というのはいったい、どうしてであろうか。

食事の後片付けのことばかり、なぜくどくどというのかと不審がられる人もあるかもしれない。だが物質への感謝と後始末は密接につながっており、その中でいちばん難しいといわれている食後の始末をちゃんと出来るとき、そこに徹底した実践の尊さが現われる。その始末を嫌がらずに出来る人は、他の始末も、比較的よく出来る。

一時は万事に通ずるといいうが、そうしたものが、ここにもある。軽くあしらうべき問題ではあるまい。

水、空気、石、土、といった自然的なものから、加工された様々なものによって、我々の命は支えられ、守られているのである。それは誰でも知ってはいる。物質を軽蔑したり、無視したりすることは自分自身の命を危うくするのである。だが、それでは物質にそれだけ感謝をしているのかというと、必ずしもそうではない。

感謝はいろいろな形で現れる。使うとき大切にするとか、愛情をかけるとか、様々であるが、そのものの後始末をよくしてやるというの、感謝のおのずからなる表現にほかならない。

『繁栄の法則』より